3.11 ソレカラ

～障害者・福祉職員の「あの日」と「ソレカラ」～

◎松田千絵さん（女性／当時40代／聴覚障害）

情報が入ってこない不安と恐怖。人と人との絆が、障害をカバーしてくれた。

― 松田さん ―

― 避難所となった浄念寺 ―

地震直後　緊急時に困難だった情報交換。筆談ボードを使うことで状況を知ることができた。

松田さんはあの日、気仙沼市鹿折地区にある缶詰加工の会社で包装や出荷などの仕事をしている時に地震に遭いました。激しい揺れが収まった後、工場内ではすぐに点呼で安否確認が始まり、上司の指示により全員で工場裏手の高台に避難しました。避難は徒歩でしたが、前後を同僚に挟んでもらい、前の人について避難したため困難はなかったそうです。この時、松田さんはまだ津波が来るとは思っていませんでした。そのため避難を終えた 15 時頃に、自宅に戻ろうとしたのです。しかし会社の同僚に止められ、高台にとどまりました。15 時半頃、津波を目の当たりにしてようやく同僚に止められた理由を理解し、足が震えたといいます。

避難した高台には集会所があり、松田さんはそこに2日間避難しました。避難した翌日には、松田さんの娘が在籍する中学校に会社の上司が安否を確認しに行き、無事を確かめてくれました。そのおかげで 13 日に中学校まで歩いて向かい、無事娘と再会することができました。

会社の従業員の中で、聴覚障害者は松田さんただ一人でした。そして普段の社内でのコミュニケーションは、ほとんどが筆談でした。そのため避難した時も、持参した筆談ボードが大変役に立ちました。それを使って、筆談で情報交換をすることができたからです。「もし筆談ボードがなかったら、身振りで伝えるか、情報が伝達できずに我慢するしかなかった」と松田さん。

高台にとどまって津波を逃れたことやスムーズに娘と再会できたことも、筆談を含むコミュニケーションがカギになりました。

避難所　同僚の計らいでお寺の避難所へ。安心して生活する心の余裕を取り戻す。

娘と再会できた松田さんは自宅へ帰ろうとしましたが、再び同僚に止められました。自宅はライフラインが断絶されて、日常生活を送るのが難しいと教えてくれたのです。さらに、その同僚がお寺を開放した避難所に松田さんと娘を連れていき、事情を説明してくれたおかげで、松田さんは約 1 ヵ月半にわたりその避難所で生活することができました。「自分だけでは全く情報が入らなかったので、避難所に入れた時は本当にホッとしました」と、松田さんは同僚の計らいに感謝しています。

誤解　挨拶の返事ができないことが、誤解を呼ぶ結果に。自ら情報発信する大切さを学ぶ。

避難所に生活してすぐ、松田さんに困ったことが起きました。避難者同士で挨拶など声を掛け合う時、松田さんは周りの人の声が聞こえないため、挨拶してくれた人が「松田さんに無視された」と勘違いして気分を害してしまったのです。それに気づいた松田さんは、次の日、挨拶してくれた人にお詫びも兼ねて自身の耳の状態を打ち明けました。するとお互いの誤解が解けて、以後は助け合う仲になることができました。松田さんはこの時、「緊急時は、自分が聞こえないことをはっきり伝えなくてはいけない」ということを、体験を経て知ったと話しています。

（2 枚目に続く）